

ISSN 2432-8782

佛教大学 総合研究所報

Research Institute of Bukkyo Univ.

2026.3 No. **47**

- 巻頭言
- 2025(令和 7)年度 共同研究活動報告
- 2025(令和 7)年度 共同研究総合評価の実施
- 佛教大学総合研究所紀要第 33 号 目次
- 彙報

佛教大学総合研究所

二度目のご挨拶

総合研究所 所長 松本 真治

2025年4月に総合研究所長を拝命し、二度目の登板となりました。前はわずか一年限りでしたが、今回は来年度二年目を迎え、都合三年目の経験を活かして、総合研究所の活動をさらに活発にするために努めてまいりたいと思っています。関係諸氏のご協力を節にお願いする次第です。

総合研究所の現状:共同研究「常設研究」

総合研究所の基幹活動として位置づけられるのは「共同研究」であり、「共同研究」には「常設研究」「プロジェクト研究」「学術交流協定機関共同研究」の三種類があります。このうち研究規模として最大であり、「共同研究」のフラッグシップとなるものが「常設研究」です。

「常設研究」は、総合研究所共同研究（常設研究）採択審査に係る内規では、「佛教大学学則第1条に規定する目的使命に関連した課題」であり、「長期間継続して取り組む学術研究」とであると規定されています。この「常設研究」ですが、2018年度～2021年度の「南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究」（研究代表：近藤敏夫先生）以降、開店休業の状態でしたが、ついに2026年度より「子ども・学校の諸問題に関する研究および社会連携活動」（研究代表：原清治先生）が新たな「常設研究」として動きはじめます。

研究員としては本学教員が学部横断的に参加し、外部の専門家にも嘱託研究員として参加していただくことに加え、研究協力者として京都府教育委員会および京都市教育委員会にも連携協力して研究に取り組んでいただくこととなっています。学校・家庭・地域における子どもや若者を取り巻く諸問題について、教育学、仏教学、社会学、社会福祉学、保健医療など、複数分野を横断した研究成果の蓄積が可能となり、さまざまな学問領域が共通の研究課題に取り組むことで、一分野では解決が困難な複雑な問題に対し、より包括的な理解や革新的なアプローチが展開できることが成果として期待されています。また、プロジェクトの始動に先立ち、3月20日に嘱託研究員の土井隆義先生（筑波大学教授）をお招きし、キックオフ講演会「子どもの居場所の現状と課題～今日の学校に求められるもの～」が開催されました。

総合研究所の現状:共同研究「プロジェクト研究」

「プロジェクト研究」は研究期間3年以内、研究費500万円以内ですが、2023年度開始のプロジェクト研究を募集した際に応募がなかったことから総合研究所運営会議において対応を検討し、2024年度開始のプロジェクト研究募集から研究期間3年以内・研究費500万円以内のAと研究期間1

年限定・研究費100万円以内のBの二種類という設定になっています。

「プロジェクト研究A」については、2024年度よりはじまった3件が来年度に最終年の3年目を迎えることになります。それぞれのプロジェクトからどのような研究成果が得られるのか、今から楽しみです。乞うご期待です。

「プロジェクト研究B」については、2026年度開始のプロジェクトを今年度募集し、2件の申請があったものの、残念ながら最終的には採択となったものはありませんでした。

なお、「プロジェクト研究B」のあり方について検討した結果、2026年度以降はAとBという二種類の設定は取りやめ、研究期間3年以内・研究費500万円以内の「プロジェクト研究」一種類に限って募集をすることとしました。採択審査で悩ましいところが、1年間限定のプロジェクトでどの程度の研究成果を求めることができるのか、です。研究内容によっては1年間限定の研究は不向きな場合もありますが、かと言って、毎年AとBの両方が募集されているわけでもありません。来年度は2027年度開始のプロジェクトを1件募集予定ですので、教員のみならず、ふるってご応募ください。言うまでもありませんが、研究期間1年のプロジェクトであっても応募申請は可能です。

総合研究所の現状:特別研究員懇談会

2025年度も総合研究所特別研究員懇談会を開催しました。今回は特別研究員9名全員に、10分～15分程度で

1. ご自身の研究について、その内容と面白さを全く何の知識もない人にもわかるように紹介してください

2. 現在ご自身が取り組んでおられる研究課題について、

①これまでに何が明らかにされているのか、②ご自身がこれから何を明らかにしようとしているのか、③研究の意義は何か、について紹介してください

という課題をお願いしました。当日紫野キャンパスに来学して対面で発表するか、来学できない場合はオンライン（Zoom）で発表するか、当日参加が叶わない場合は、事前に発表動画を作成して提出してもらいました。全体として3時間半を超える長丁場となりましたが、いずれも興味深い発表ばかりで、あっという間に終了しました。その後、しょうざんリゾート京都・楼蘭にて行われた懇親会でも、アカデミックな話題を含め様々な話で盛り上がりました。

当日会場には特別研究員5名と総合研究所運営会議構成員だけではなく、八木透先生、大西磨希子先生、清川祥恵先生、渡勇輝先生にもお越しいただきました。その他にもZoomでご参加いただいた先生方もおられます。この場をお借りして御礼申し上げます。

2026年度の特別研究員の申請者は継続8名、新規9名の合計17名で大所帯となりますが、来年度も引き続き特別研究員にとって実りある懇談会を開催するために、現在新しい試みを計画しているところです。

■プロジェクト研究A

「多死社会を見据えた社会的共通資本の向上による地域共生社会の創造を目指した人材育成プログラムの検討」（2年目）

研究代表 濱吉 美穂

研究組織

<研究員>

濱吉 美穂 保健医療技術学部教授
 八木 透 歴史学部教授
 清水奈穂美 保健医療技術学部准教授
 阿部 慈美 保健医療技術学部講師
 安本 厚子 保健医療技術学部助教
 高木 健志 社会福祉学部教授
 市川 定敬 仏教学部准教授
 坪井 剛 仏教学部准教授
 白井はる奈 保健医療技術学部准教授
 奥山 結平 保健医療技術学部助教
 渡邊 照美 教育学部准教授
 大藪 俊志 社会学部教授

<嘱託研究員>

高 淑娟 輔仁大学医学院 副教授（非常勤）
 慈済大学病院ホスピス病棟臨床宗教
 師佛教大学非常勤講師
 末安 民生 保健医療技術学部客員教授
 植村小夜子 元保健医療技術学部教授

2. 研究進捗状況

2025年度は、共同研究者による合同会議を9回実施し、研究全体の進捗状況の共有と研究内容についての議論を進めた。教育介入の効果検証に関する研究全体の概要は図1参照。

2024年度から2025年度にかけて実施した先駆的施設へのヒアリング結果のデータ分析結果より、教育介入プログラムの骨子を最終決定した（表1参照）。

校内の倫理審査を経て、学内全学部学生への研究協力依頼を行い10名の研究協力者を得る事ができた。

図1：研究全体の概要



表1：教育介入の骨子

1.自己と他者理解と死生観	・死生観に関する講義、自己理解と他者理解 ・あらたに開発予定の共通・なりきりゲーム体験	動画授業 ＆ ワーク
2.自ら考える力	・長徳寺周辺の地域課題を考え、お寺で地域住民が繋がりを築くために何が出来るか？ ディスカッション	ワーク ＆ 動画授業
3.マネタイズ	・地域活動継続のためのマネタイズ	動画授業
4.人と人を繋げる力	・人と人を繋げる、地域力を引き出すために	動画授業
5.活動を広げるための「一歩踏み出す力」	・長徳寺周辺で聞き込み調査をしてみる	ワーク
6.組織を固めるリーダー性	グループワーク	ワーク

3. 教育プログラムの実施

導き出した教育プログラム骨子を基に、具体的な教育プログラム内容を検討の上決定した。

① 事前動画視聴学習

(2026年2月15日からYoutubeにて限定公開配信中)

研究協力者の多学部学生に対して、対面ワークショップ参加前に以下の動画を視聴する事前学習を課した。（全120分）

- ・濱吉美穂 研究概要説明動画
<https://youtu.be/tXNnIfr4XaA>
- ・大河内大博先生 地域活動の実際
<https://youtu.be/lb6MflriVLU>
- ・高木健志先生 地域活動の作り方
<https://youtu.be/jjblfZTQASo>
- ・坪田康佑先生 マネタイズ
<https://youtu.be/RpkRf8m2-m4>

② 対面教育介入ワークショップの概要

2026年3月3日（火）の9：00～16：00

～多死社会を「多幸社会」へ変えるデザイン会議～
 ～「お寺を地域で一番“生きてる”を実感できる場」～というテーマで、多学部の研究参加応募学生とのワークショップを実施。

お寺を地域活動のハブとして考えるにあたって、どのようにお互い様の精神を生み育てるような地域活動ができるかを考え共有した。（生活者として、この地域で暮らすにあたって、どんな助け合いの場・居場所があればよいか？）具体的なプログラム概要は以下の通り。

表2：教育プログラム内容

内容	時間
1 ガイダンスと教員紹介	10分
2 自己紹介、お互いを知るアイスブレイクワーク	40分
3 他人事をわがごとく考えるカードゲーム	40分
4 お寺の周辺地区探索	30分
5 お寺をハブにした地域住民を巻き込むお互い様活動はどのようなものが可能か？ グループで具体的な運営について検討	120分
6 検討内容の発表	60分

③対面教育介入ワークショップ実施の状況

研究協力者は、仏教学部、歴史学部、理学療法学科、

作業療法学科、看護学科の学生10名であった。

3つのグループに分けて、共同研究者がグループワークのファシリテーターとなって進行した。

今回取り入れた3.「他人事をわがごとく考えるカードゲーム」は、本研究共同研究メンバー間のワークショップを基にデザイン会社と協働開発したゲームキット「HTRAKU」～わたしの価値観に気づく対話キット～を活用した。自分ごととして自分の価値観、大切にしている事を他者と対話することを促すものである。日常の延長として、「自分は何を大切にしたいのか」に気づくための時間を創った。

対面ワークショップ参加者からは、繰り返し参加したい、自分や地域を見つめなおす時間になった、といった感想が得られた。現在得られたデータを解析中である。



■プロジェクト研究A

「タイ貧困層に暮らす障がい児が医療、教育を受けるための評価システムの構築」（2年目）

研究代表 和智 道生

研究組織

<研究員>

和智 道生 保健医療技術学部講師

青木 好子 教育学部教授

<嘱託研究員>

寺田 恭子 桜花学園大学保育学部教授

里中 綾子 愛知淑徳大学健康医療科学部教授

熊澤友紀子 愛知淑徳大学国際交流センター助教

研究進捗状況

本研究は、タイの貧困層に暮らす障がい児およびその家族を対象として、医療・リハビリテーション・教育へのアクセス状況を把握し、地域の実情に即した評価システムを構築することを目的としている。令和6年度は主として東北部農村地域を対象に自宅訪問を実施したが、令和7年度は対象地域をタイ南部のソクラー県ハジャイ周辺へ広げ、地域差を踏まえた調査を進めた。

ハジャイはマレーシア国境に近い南部の交通・商業の中心地であり、仏教徒、中華系住民、ムスリムなどが共生する多文化地域である。加えて、令和7年11月に記録的降雨が発生し、大規模な洪水被害が発生した。今回の調査地であるハジャイを含むソクラー県でも110人の死亡が報告され洪水直後には道路の寸断、停電・断水、通信障害など、地域の生活インフラにも深刻な影響がみられた。12月上旬以降、清掃作業や水道・電力等の基本サービスの復旧が進められている状況であった。タイ南部は、他地域と比べてイスラム教徒の割合が高く、家族の

生活習慣、食文化、宗教行事、地域コミュニティのつながりが支援の受け入れ方に影響する可能性がある。そのため本年度の調査では、障がい児本人の身体機能や日常生活動作だけでなく、家族構成、介護者の役割、宗教・文化的背景、学校や医療機関までの移動手段、地域内で利用可能な支援資源についても聞き取りを行った。

現地調査では、ハジャイを中心に障がい児の自宅を訪問し、家庭内での生活環境、移動・姿勢保持の状況、就学状況、医療・リハビリテーション利用状況を確認した。

痙直両麻痺の女児



本児には近隣の小学校への就学希望がみられたが、過去に小学校へ通学した際、友人と同様の活動に参加することが困難であったことから、家族の判断により退学に至った経緯があった。一方で、一定の運動機能は保持されており、適切な環境調整や支援体制のもとで教育を受けられる可能性が考えられた。そのため、関係機関と協議し、特別支援学校への入学に向けた検討を行った。

痙直アテトーゼの男児



本児は両親による養育が困難な状況にあり、祖父母が主たる養育者となっていた。家庭の収入は祖父母の年金および障害者手当が中心であり、経済的に限られた環境で生活していた。入浴には雨水を貯留した水を使用し、屋外で身体を洗う状況であった。また、祖父母も高齢であるため、将来的な養育体制や生活支援の継続について検討を行った。



・研究会等の開催状況

令和7年度は、タイの小児リハビリテーションに携わる理学療法士、および障がい児とその家族を対

象としたシンポジウムを2日間開催した。本シンポジウムには南部12県から理学療法士40名程の参加があった。シンポジウムでは、日本およびタイにおける小児リハビリテーション、障がい児支援、家庭での生活支援、地域資源の活用に関する情報を共有し、参加者との意見交換を行った。



専門職向けの内容では、日本とタイでの小児理学療法法の共通点や制度的に異なる点などを通して、評価方法や介入方針、家族支援のあり方について議論し、障がい児向けの内容では、家庭で取り組める運動や姿勢管理、日常生活上の工夫、サービス支援について情報提供を行った。シンポジウムで得られた専門職および家族の意見は、今後の評価項目の精査と支援モデルの検討に反映する予定である。

■プロジェクト研究A

「行者の出現と遊行遍歴による伝播の総合的研究」（2年目）

研究代表 齋藤 蒙光

研究組織

＜研究員＞

齋藤 蒙光 仏教学部准教授

南 宏信 仏教学部准教授

坪井 剛 仏教学部准教授

三好 俊徳 仏教学部准教授

田中 裕成 仏教学部講師

＜嘱託研究員＞

服部 純啓 佛教大学非常勤講師

＜学術研究員＞

板野 弘映 大学院文学研究科博士後期課程

任 文 海 大学院文学研究科博士後期課程

・研究進捗状況

本共同研究では、日本において「行者」と呼ばれる宗教者について多角的に研究を行っている。具体的には、行者が霊場においてどのような活動を行っていたのか、またどのような信仰が見られるのか、その背景となる仏教思想はどのようなものなのかといった点を、文学・歴史学・仏教学の諸視点から検討し、その社会的・宗教的な影響を総合的に明らかにすることを目的としている。

本年度は昨年度に引き続き、【文学・歴史文献班】と【仏教・浄土教文献班】【インド仏教文献班】に分かれて、行者に関する資料を分析するとともに、実際に行者が活動した各地の霊場に行き、フィールドワークを行ってきた。また、研究員の研究成果を発表する研究会や、学内外から関連する研究者を招いて、当該分野の研究状況を共有する公開研究会を開催した。各研究班における昨年度の成果は以下の通

りである。

【文学・歴史文献班】

本研究班の目標は、日本における行者とよばれる宗教者の活動やそれに対する信仰が社会や宗教文化にいかなる影響を与えたのかを、歴史史料や文学資料に基づき解明することである。昨年度は、フィールドワークで訪れる霊場に係わる史資料を収集するとともに、古代・中世の説話集や歴史書などから関連記事を集め、その検討を進めた。なお、インド仏教文献班による研究成果をもとに、日本の説話とインド仏教の史資料との関わりについて議論を深めることができた。今年度は、日本の史資料を用いた研究を軸としながらも、インド仏教文献班と協同して比較研究を進めることも目指したい。

【仏教・浄土教文献班】

今年度は、法然諸伝記に見られる修験者関係の説話を対象に、「摂益文」と「公胤夢告」に注目し、修験と浄土教の関係および伝記編纂意図を検討した。まず、聖護院静恵往生譚を中心に諸伝記の異同を比較し、描写の差異や後代的な聖伝化の傾向を指摘した。とくに「摂益文」は多くの法然諸伝記に見られるが、『四十八巻伝』では法然臨終の象徴として特権化され、静恵譚から「摂益文」が除外されている点を明らかにした。さらに直聖房・作仏房の譚における夢告説話を検討し、『四十八巻伝』では熊野権現の夢告に再編され、修験の権威が念仏の正当性を保証する構図が示されることを論じた。以上より、修験者像は念仏の普遍性を支える重要な役割を担うことを指摘した。

また真言系念仏聖の思想的支柱となった、覺鑊の浄土教思想を解説する研究会についても継続して開催している。

【インド仏教文献班】

本研究班はインド仏教における聖者観やその霊地・逸話を収集し、日本の行者像の源泉となるものはなかったか、検討することを目標としている。

本年度は、日本の『今昔物語集』天竺部に採録される一角仙人の説話について検討した。この説話では神通力を有していた一角仙人が、女性と接触したことを契機に神通力を失ってしまうとしているが、その論理の背景となったのは『大毘婆沙論』で説かれる煩惱の発生に関する故事とその解釈であろうと思われる。このように、日本の仏教説話集の行者像においても、インドの仏教思想が背景となっているものが確認できる。今後も同様の事例を収集することから、両者の関係について考察を進めたい。

・研究会等の開催状況

研究会（佛教大学第5会議室）

日時：2025年7月16日18：00～

発表者：田中裕成（研究員）

論題：「墮落する神通仙人」

第2回公開研究会（佛教大学1-404教室）

日時：2025年10月15日（水）14：30～

発表者：板野弘映（学術研究員）

論題：「インド・チベット・日本における行者像と現状」

第3回公開研究会（佛教大学1-404教室）

日時：2025年12月10日（水）14：40～

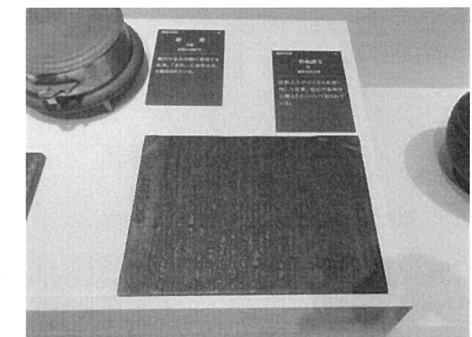
発表者：山本潤（薬師寺宝物管理研究所研究員）

論題：「薬師寺と南都修験道」

フィールドワーク（通算第4回）

日時：2026年3月27日（金）～29日（日）

場所：有珠山善光寺 国立アイヌ民族博物館等



2025（令和7）年度 共同研究総合評価の実施

総合研究所では共同研究に対する点検・評価を目的として「佛教大学共同研究評価ボード規程」に基づき進捗評価および総合評価を実施しており 2025（令和7）年度は2件の総合評価を実施した。

総合評価は、本学の今後の研究活動の活性化、ならびに研究成果の発信、活用、社会への還元等に資することを目的としている。今年度対象となった共同研究は、次の2件であった。

①プロジェクト研究「With コロナ時代の看護学生に対する VR（仮想現実）臨床実習法の開発およびキャリアデザインの動向調査とその支援」研究代表：安居幸一郎（保健医療技術学部教授）

②プロジェクト研究「新型コロナウイルス感染下における子どもの権利擁護」研究代表：武内 一（社会福祉学部教授）

評価ボードは、評価ボード長となる副学長、研究推進機構長、学長の指名する評価協力者（若干名）及び研究推進部長をもって構成され、評価協力者として、学外研究者1名、学内研究者2名に依頼した。

評価ボード（会議）では、匿名性を重視して評価を行うため、評価協力者から提出された共同研究評価意見書は氏名を伏せた状態で資料とし、意見書に記載された内容について、評価項目に沿って、意見交換が行われ評価が決定された。それを取り纏める形で、評価ボード長により「共同研究 総合評価」が作成された。総合評価は、総合研究所運営会議ならびに研究推進機構会議に報告がなされ、研究代表へ通知された。

評価ボードによる総合評価の実施スケジュール

5月23日 各研究代表へ共同研究成果報告書の作成を依頼

7月7日 共同研究②代表より共同研究成果報告書の提出

7月8日 共同研究①代表より共同研究成果報告書の提出

7月25日 共同研究評価協力者へ共同研究評価意見書の作成を依頼

9月30日 評価協力者より共同研究評価意見書の提出

10月22日 共同研究評価ボード（会議）を開催し総合評価結果を決定

11月20日 「共同研究総合評価」を評価ボード長により作成、確定

12月10日 総合研究所運営会議ならびに研究推進機構会議へ総合評価結果を報告

12月17日 研究代表へ総合評価結果を通知

佛教大学総合研究所紀要 第33号

（2026年3月25日刊）

目次

〈論文〉

柏原八幡宮本『八幡大菩薩御縁起』考
—八幡縁起絵巻の諸本展開—

筒井 大祐

〈論文〉

入百姓「足留」寺院の設置
—常陸国麻生藩領の真宗寺院—

井上 幸子

〈論文〉

キリスト教徒になった平田門人
—水野功の受洗と『明烏迷の目醒』—

相澤みのり

〈研究ノート〉

岩手県盛岡市土淵地区に伝承される「さんさ踊り」について

中嶋奈津子

彙 報

■2025（令和7）年度 総合研究所組織

所長	松本 真治									
研究推進機構	作田誠一郎*	三好 俊徳	有田 和臣	李 昇燁	箕浦有希久					
会議委員	谷本 和也	小池 桂	白井はる奈	中村 隆司						
	中西 正泰									
	大西 伸江**									
運営会議委員	松本 真治*	齋藤 蒙光	佐古 愛己	平田 豊誠	香西 豊子					
	村上 武敏	越智 淳子	米林 寿美	中西 正泰**						
紀要編集委員	松本 真治*	齋藤 蒙光	佐古 愛己	平田 豊誠	香西 豊子					
	村上 武敏	越智 淳子	米林 寿美	中西 正泰**						
事務局	米林 寿美	(※は委員長) (**)はワグザバー								

■2025（令和7）年度 共同研究

No.	研究名	代表名	研究期間(年度)
1	(プロジェクト研究 A) 多死社会を見据えた社会的共通資本の向上による地域共生社会の創造を目指した人材育成プログラムの検討	濱吉 美穂	2024～2026
2	(プロジェクト研究 A) タイ貧困層に暮らす障がい児が医療、教育を受けるための評価システムの構築	和智 道生	2024～2026
3	(プロジェクト研究 A) 行者の出現と遊行遍歴による伝播の総合的研究	齋藤 蒙光	2024～2026

■2025（令和 7）年度 総合研究所特別研究員

総合研究所では、本学大学院博士後期課程修了者または単位修得満期退学者で、本学において学術研究を希望する研究者に対し、総合研究所特別研究員規程に基づき特別研究員を募集し、9 名を任用した（任用期間は 2025 年 4 月～2026 年 3 月）。

また、総合研究所特別研究員制度の課題について総合研究所運営会議にて協議し、「総合研究所特別研究員規程」を改正し、2024（令和 6）年度より、任用年度中の付帯義務としていた競争的資金（科学研究費補助金等）への申請に対して、申請を行なうことに努めるものとした。

氏名	研究テーマ
近藤 伸介	ユクスキュルの環世界と唯識の器世間
清田 政秋	本居宣長の漢意批判と仏教思想一言語論の視点から―
田中 タ子	十世紀の在家者の信仰について―『九暦』と『日本往生極楽記』を中心に―
筒井 大祐	蒙古襲来を画期とした文学形成の基礎的研究
河本 信雄	幕末佐賀藩のアーモストロング砲模造の実態解明および田中久重に関する研究 深耕
中嶋奈津子	神楽の継承と伝播の研究―なぜ、早池峰神楽は継承できたのか―
井上 幸子	近世の百姓移動に伴う寺院の動向に関する研究
相澤みのり	平田国学の薩摩における受容と顕幽論
山口 瑞穂	アドヴェンティスト明石順三とその宣教に関する研究

■活動記録〔2025（令和7）年4月～2026（令和8）年3月〕

2025年

- 4月 9日 第1回研究推進機構会議
- 22日 第1回総合研究所運営会議
- 23日 第2回研究推進機構会議
- 5月13日 第2回総合研究所運営会議
- 21日 第3回研究推進機構会議
- 6月 3日 第3回総合研究所運営会議
- 4日 第4回研究推進機構会議
- 18日 第5回研究推進機構会議
- 7月 9日 第6回研究推進機構会議
- 15日 第4回総合研究所運営会議
- 9月 9日 第5回総合研究所運営会議
- 10日 第7回研究推進機構会議
- 12日 総合研究所特別研究員懇談会（対面・Zoom 併用）懇親会（対面）
- 10月 1日 第8回研究推進機構会議
- 15日 第9回研究推進機構会議
- 11月 5日 第6回総合研究所運営会議
- 12日 第10回研究推進機構会議
- 12月 10日 第11回研究推進機構会議
- 10日 第7回総合研究所運営会議
- 18日 第8回総合研究所運営会議（メール会議）

2026年

- 1月 7日 第12回研究推進機構会議 中止
- 21日 第13回研究推進機構会議
- 2月 4日 第14回研究推進機構会議
- 18日 第15回研究推進機構会議
- 25日 第9回総合研究所運営会議
- 3月 6日 第10回総合研究所運営会議
- 11日 第16回研究推進機構会議

■編集後記

『佛教大学総合研究所報』第47号をお届けします。2025年度は2件のプロジェクト研究の総合評価を実施しました。『佛教大学総合研究所紀要』第33号には、特別研究員による3本の論文と1本の研究ノートが掲載されています。本学専任教員にとっては学際的な共同研究の場、特別研究員にとっては研究者として自立するためのステップアップの場としての総合研究所の今後の活動をご期待ください。（M）

佛教大学総合研究所報 第 47 号

発 行 2026(令和 8)年 3 月 25 日

発行所 佛教大学総合研究所

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町 96

TEL:075-491-2141(代表)

FAX:075-495-2151(直通)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/facilities/labo/>